交換される身体、奪われる生
貧困と軍事化のなかのフィリピン女性たち

ジョイ・バリオス
マリー・カーリング、リタ・マリアノ、ホセ・ティト・ロヨラ
ルー・バイロシス、フィリピン女性資料センター

女であることは
戦時を生きること
私たちは貧しき母親
戦争の暴力は
切り落とされた
死者たちの首だけでなく
食べるもののない
食卓の上にも

Ang Pagiging Babae ay Pamumuhay sa Panahon ng Digma（女であることは戦時を生きること）
1990 より

この詩、「女であることは戦時を生きること」が描くように、フィリピン女性の生のあり様は二つの事柄によって規定される。ひとつはフィリピンの極度の貧困である。これは植民地支配の歴史にその起源を持ち、帝国主義グローバリゼーションによって深刻化してきた。もうひとつは軍事化である。これは抑圧的な政治体制とかつての植民地宗主国の軍隊、米軍の駐留継続によるものである。この貧困と軍事化こそが、フィリピン女性たちを糧をえるための身体の売買へと、あるいは国内の他の場所での出稼ぎへと、そしてまた経済的、政治的体制の変革を求める民主化闘争へと駆り立ててきたのである。

この調査報告は、女性のエンパワーメント、情報提供、組織化などの様々な活動に従事する NGO あるは民衆組織の女性たちによるフィールド調査に基づくものである。この中ではフィリピンの三つの地域に焦点をあてている。まず中部ルソン地方、ここにはとくにかつて米軍基地が存在したアンヘレス市と、2004 年に農業労働者の虐殺事件が発生したルイシタ農園があるタルラック市がある。次にフィリピンの北部に位置するコルディレラ地方、ここでは先住民たちが先祖伝来の土地を守るために闘っており、また反乱鎮圧を目的として大規模な国軍の展開が行われている。そしてマニラ首都圏、とくにミンダナオ地方の軍事化を逃れて移住してきたイスラム女性たちのコミュニティーに焦点をあてる。

本調査は大阪外国語大学の藤目ゆき教授を中心とする多国間にわたる「軍事主義とジェンダー」研究の一部である。また本調査ではフィールド調査に基づく資料の分析とともに文芸作品や大衆文化などにも注目し、学際的なアプローチを取った。本調査では次の疑問への答えを提起することを目的とした。軍事化と貧困がどのようにフィリピン女性、とくに調査対象地の女性たちに影響を与えているか。こうした状況に女性たち

がどのような対応を行ってきたか。報道写真に見られる軍事化のイメージからどのように軍隊のマチズモ（男性優位主義）に関する構造的分析を行うことができるか。米比両軍の兵士たちと彼らが駐留する地域との間にどのような性的権力関係が生まれているか。売春するフィリピン女性の身体を、どのような意味で軍事化されたフィリピン社会における暴力のメタファーと見ることができるのか、などである。

調査開始に先立って、調査の計画作成と方針に関するワークショップをフィリピン大学で行った。フィリピン大学のソーシャル・ワーク及びコミュニティー開発学科と女性学部で教鞭をとるジュディ・タギワロ教授、CWR（女性資料センター）のジャートルード・リバン氏、そして私を中心にして開かれたこのワークショップの場において、調査目標と方法論を確認した。本調査はこうした人々の集団的努力の成果として実現されたものであることを強調しておきたい。

枠組、事実および全体像：ケース・スタディーの統合

私たちはフィリピン女性たちの現在の状況を調査するのであるが、そのためにも植民地化、売春、女性に対する制度化された暴力に関する歴史を振り返る必要がある。これについてはブレンダ・ファジャルド（Brenda Fajardo）が描いたフィリピン史をテーマにした一連の絵画作品のなかの二点、「アメリカの占領：マリアをサムに売ったフィリップ」（1989）と「日本の占領：マリアを奪った０脚と、彼女を還せと叫ぶサム」（1989）がその歴史を最も象徴的に描き出している。

この二つの絵画のなかには両方ともその中心に大きな像が描かれ、そしてその周囲を小さな像が取り囲んでいる。占領という暴力はこの中心に置かれたものによって表現される。外国人男性が銃を構え、あるいは戦車にのり、占領軍（米国と日本）の旗（これは男性器を象徴するとも読み取れる）を持つ様子が描かれる。ふたつの小さなイメージがたくさん描かれているが、ひとつは羽を持った女性でそこには「非暴力と愛」と書かれており、もうひとつはまた別の女性でこの女性はライバル関係にある二人の外国人の恋人にはさまれていて、そこには「恋人たち」と書いてある。この両者の対比、つまり軍隊のマチズモ（征服者、植民者としての男性像）と征服の性的シンボル（求愛のなかの女性）あるいは平和を愛する存在としての女性との間の対比関係は、今日においても現実に見られるものである。さらにいえば、この作品は売春女性とくに米軍基地あるいは米軍が駐留している地域で働く売春女性をめぐる複雑さをも示している。

この作品はフィリピン史の重要な部分を描いている。植民地化という暴力によって売春が制度化されたという事実である。マリア・ルイサ・カマガイの著書 *Working Women in the 19th Century*（1995）は国立公文書館とマニラ総合マイクロフィルム・コレクションからの資料を引用して、売春の罪で起訴され投獄あるいは強制移住となった女性たちのリストの存在を明らかにしている。カマガイはスペイン植民地時代（1521 年から 1898 年）の売春をその形態に基づいて 4 つのカテゴリーに分類している。売春宿に囚われる場合、キアポ、ビノンド、トンドそしてシンガロンなどマニラ内の特定の地区での売春、買春者（主に中国系住民）の家に出向いての売春、特定の男性の家で生活し売春したもの、の 4 つの形態である。さらに彼女は 3 つの重要な事柄を指摘している。第一に売春女性に対する呼び名である。prostituta（売春婦）、mujer publica（公の女）、vagamundo（ごろつき）、indocumentada（無登録者、住民登録のない者）などと呼ばれたが、これ自体が売春女性に対する社会からの価値判断を示している。第二に、売春に従事した女性たちの多くが仕事を探しにマニラに出稼ぎに来たが、経済的困難のために売春するようになっているということである。カマガイはこれについていくつかの証拠を示している。第三に梅毒などの性病が流行したために、公衆衛生局が売春女性を統制するために売春の許可制度を作ったということである。（Camagay 1995 pp.109-115）

カマガイの著書からは売春女性の身体が三つの方法によって統制されたことが読み取れる。第一に投獄や強制移住という物理的な監禁。第二に彼女たちの仕事を社会がどのように見ているのかを示すような呼び名によって（例えば「ブラブラしている」とか「公の」など）その身体を「呼び習わす」こと。第三に政府機関による許可証の発行によって「刻印する」こと、である。

こうして売春に追いやられた身体の統制は、短期間に終わったエミリオ・アギナルド将軍の革命政府の時期、さらに前述のファジャルドの作品に描かれた新しい植民者の時代にも継続された。ルイス・デリの著書*A History of the Inarticulate*（語られなかった歴史）（2001）に収録された論文"Prostitution in Colonial Manila"（植民地下マニラの売春）には、1898年8月13日にアギナルド政権が保健委員会を設立して売春を統制することを試みたとの記述がある。トマス・カバンギス博士を長とするこの保健委員会は、売春女性を統制するためのガイドラインを作成する任務を課せられた。このガイドラインのなかには、許可証の交付条件としての強制性病検査などがあげられている。

だがフィリピン革命政府はそれ自身、長くは続かなかった。1989年8月マニラに駐留していた1万人の米軍部隊は、比米戦争の激化のなかで7万人にまで増員された。1902年から1918年という米植民地支配の最初の時期、駐留していた軍人の数は平均で17,000人である。外国軍隊の駐留は売春の増加をもたらした。そこにはフィリピン女性だけではなく、外国人の女性たちも含まれている。1903年の人口調査によれば、この年マニラには476人の登録された売春婦がいたとされている。そのうち75人は白人で、260人が日本人を中心とするアジア系外国人女性、そして141人がフィリピン人である。当時のタフト総督は売春の役割について「軍隊にとっての必需品」と述べている。(Dery 2001. p.136, p.139)

米植民地支配下で様々な統制制度が創られた。まるで憲兵司令官のようにふるまった米陸軍准将ジョージ・デイヴィスは、客となる兵士の階級によって売春を三つのタイプに分類した。将校にサービスを提供するもの、下士官を相手にするもの、一般兵卒を相手にするもの、である。この分類はその後、売春の形態として「間貸し屋」が一般的になると統制の効果を失っていったのだが、それでもなお売春させられる身体の制度的統制を象徴するものとなったのである。(Dery 2001. p.143)

日本による占領期（1942年から1945年）、女性の身体の戦争への利用はよりはっきりとした形で行われた。包括的な統制制度である「マニラにおける売春宿及び許可飲食店に関する法令」が1943年に制定され実施されたのもこの時期である。ジョージ・ヒックスは著書*The Comfort Women*（慰安婦）（1995）のなかで、この種の「休養施設」を開設するためには複雑な手続きが必要だったと述べている。例えば管理者は事業経営の経験を持つ日本人でなければならなかった。また経営計画書と誓約書を含む申請書類を提出しなければならなかった。さらには従業員の名簿と各人の経歴書、そして「売春女性」としての証明書も必要とされた。また様々な遵守事項には次のようなものがあった。感染防止のためのカリウム系水溶液あるいは濃度0.5%のクレゾール石鹸水溶液の定期的使用。一日一度の入浴。接吻の禁止。そして客の階級とサービスの時間に基づく支払額の規定（例えばマニラでは将校は一時間4ペソ、一泊8ペソ。民兵や下士官は2ペソ50センタボ、民間人では1ペソ50センタボ）である。(Hicks 1995. pp.60-62)

ただしヒックスは、売春女性の多くが拉致や強姦の被害者だったと述べている。被害に関して最初に提訴したマリア・ロサ・ルナ・ヘンソンは、14歳のときアンヘレス市で拉致され、監禁中12人から20人の男たちに強姦された。彼女は6人の女性たちとともに精米所に数ヶ月間囚われたと証言している。1996年に出版された彼女の自伝には、男と女、侵略者と被侵略者、そして加害者と被害者との間にある権力関係と彼女の複雑な心境が記されている。(Henson 1996: 71)

「私は自分の母親のことを思い出す。そして私をレイプしたたくさんの兵士たちのこと、彼らの残酷さを。私をレイプし、それでも満足いかなければいつも彼らは私を殴った。私は自分

を無力だと感じた」

「田中隊長だけは私の気持ちをわかってくれていると思った。彼だけは暴力をふるわなかったし、残酷に扱うこともなかった。でも心の中では彼に対しても私はとても怒っていた」

母親が地主にレイプされていたという彼女の回想は、女性を征服の象徴として使う植民地主義の暴力だけではなく、女性を所有物とみなす封建的社会のなかにレイプと強制売春の根拠があるということを表している。ヘンソンが母親の経験について繰り返し語っていること、彼女たちの関係、その結びつきは、女性がお互いの経験を通していかに共感しあえるか、ということを示すものである。(Henson 1996: 42)

「…私は母親に自分の身に何が起こったのか話した。彼女は涙を流し、お前は殺されなかっただけ運が良かったんだよ、と言った。そしてこのことは誰にも言わないでおきなさいといわれた。私はとても悲しかった。自分のなかに痛みを感じた。そのとき私は 14 歳で、まだ生理もなかった。私は考えた。どうして私の身にこんなことが起こったのか。そして母をレイプした地主のことを思い出した。…」

フクバラハップ（抗日人民軍）のメンバーだったロサ・ヘンソンは、日本の支配からフィリピン人民を解放できるのはフィリピン人自身による他はないと信じていた。彼女は次のように述べている。(Henson 1996: 47)「フクバラハップは米国に依存しなかった。米国は退却しており、フィリピン人民は力を尽くして敵と闘ったのだ。米国人がどこにいたというのか。」これは米国によってフィリピンが解放されたという言説、たとえば 1946 年に作られた映画『ビクトリー・ジョー』（LVN ピクチャーズ製作。監督マニュエル・シロス、出演ノルマ・ブランカフラー、ロジェリオ・デ・ラ・ロサ、アート・カントレル）が描きだした世界とは対極をなしている。映画の一場面では、米国人が英雄として登場する。彼らは V サインをかざしながら意気揚々と町に到着し、キャンディを配り、住民たちに熱烈な歓迎を受ける。

アンヘレス市とオロンガポ市には第二次大戦終結後から 1992 年までの長きにわたって米軍基地がおかれた。アンネ・マリー・ヒルスドンの著書『聖母と殉教者：フィリピンにおける軍事化と暴力』には「米国は軍事作戦の実施にあたって、兵士のための慰安計画を組織した」と記されている。性的な充足が兵士たちの「戦闘準備」の一部とされていた、とヒルスドンは指摘する。さらにフィリピン人の性労働者はストリップ・ショウのなかでヴァギナにコインを入れたり、タバコを吸ったり、バナナやソーセージを切ったり、飲み込んだり、あるいは卵を割ったりするという異常な出し物によってエキゾチックさを演出させられた。(Hilsdon 1995: 97-99)

ジェニファー・バトラーは 2000 年に書いた自身の文章「軍事化された売春：語られなかった物語」のなかで、米海軍基地および空軍基地があるオロンガポ市とアンヘレス市のバーやクラブには登録者、非登録者あわせて約 55,000 人の売春女性がいると推定している。このバトラーの文章は日本、タイ、韓国のデータを基にしてアジアでの軍事化された売春の全体状況を概観しているのだが、そのなかに「リタ」という名の女性のケース・スタディーが出てくる。バトラーによれば、リタはフィリピン中部、ビサヤ諸島にあるサマール島からマニラに出稼ぎに来た。彼女は 10 歳のときにメイドとしての仕事を始める。ロサ・ヘンソンの母親がそうであったように、彼女もまた雇い主の息子に強姦されそうになる。その後、彼女はゴミ集積場でスカベンジャーになり、それからオロンガポに移ってふたたびメイドの仕事を探した。だが仕事は見つからず、彼女は売春婦となる。はじめは海軍基地のあるオロンガポで、それから日本の沖縄で。(Butler: 2000 215)

バトラーの多国間にわたる調査によって、フィリピン、韓国、日本、タイというそれぞれの国に同じような「債務奴隷」のシステムがあることが明らかにされている。このシステムによって売春宿における奴隷状態が作りだされている。軍事基地周辺のバーで仕事を探す売春女性たちは当局に登録せねばならず、そのためにエイズ検査や血液検査、尿検査、レントゲン検査や性病検査を受けた上で、登録カードを取得しなければならない。飲み物の売り上げの一部を受け取り、そして客と性交渉することによって彼女たちは収入を得る。「収入のレベルは様々である。だが彼女たちが高額の収入を得ている、というのは神話にすぎない。」(Sturdevant and Stolzfuz in Butler 2000 215)

バトラーが指摘するように売春女性たちを取り巻く環境は似通っている。したがって、フィリピンで米軍基地が閉鎖されたとき、女性たちが沖縄や韓国、グアムの基地へと移っていったという事実も驚くことではない。それらの場所で彼女たちはふたたび軍隊の需要に応えた。

フィリピンにおける売春の歴史を振り返ると、軍隊と人身売買との間のつながりがより明白にうかび上がる。「軍事化された売春」という用語をバトラーは用いた。だが軍事主義が女性に与えた影響はそれだけではない。女性たちがより多く民主化運動に参加するにつれて、また農村部での内戦が激しくなるにつれて、女性たちは武器を手にした反乱軍の兵士として、あるいは様々な運動組織の活動家として、あるいは戦闘に巻き込まれ囚われた民間人として、軍事主義のさまざまな局面に関与していくこととなる。

戦争の身体：現代フィリピンにおける売春女性、捨てられた女性、活動家、囚人

1972年から1986年のマルコス政権による戒厳令の時代、さらにコラソン・アキノ、フィデル・ラモス、ジョセフ・エストラーダ、グロリア・マカパガル・アロヨと続く各政権の時代を通して、フィリピン社会を特徴づけてきたものは軍事主義[1]であった。人権侵害の深刻さには各政権の間に違いがあったが、すべての政権期を通して良心的政治囚が生み出され、刑務所では女性への強姦を含む拷問が行われ、革命勢力を掃討するために低烈度紛争戦略が実施された。さらに、セックス観光を生み出した観光キャンペーンのみならず、外国軍あるいはフィリピン国軍の基地の存在によっても多くの売春女性や捨てられた女性たちが生み出された。

フィリピン研究チームでは各フィールド調査員によって個別の事例調査を進めてきた。収集されたデータはフィリピン女性に対する軍事化の影響についての具体事例を明らかにしている。

売春と軍隊：カビテ市の事例

フィリピン女性資料センター（CWR：Center for Women's Resources）によれば、特定の地域で売春が増加する背景には二つの要因がある。軍事基地の存在、そして政策的な土地転換と失業である。このことを証明するために、カビテ市での事例が紹介されている。

同市では軍事基地が売春をひきつけており、また一方では農地の工業用地への転換が住民の追い出しを引き起こし、その結果、女性たちが売春地区であるサングレイ地区へと追いやられている。調査に協力したローズは次のように述べている。「私の家族がカビテ市に移ったのは基地があったから。故郷に帰っても仕事はないし、失業して家族が飢え死にするのを見るよりも、売春婦になるほうがましだわ」

カビテ市のサングレイ地区（中国系資本家シャン・リの名前に由来。スペイン植民地時代にはサングレイ

1　軍事主義（militarism）について、軍事化（militarization）という用語を用いる場合もある。

岬として知られていた）は、もともと米国植民地時代に米軍の補給基地と海軍病院があった場所である。その後、米軍によって海軍基地に造り変えられた。1971年以降はフィリピン海軍、海兵隊および空軍の基地として使用されている。

軍人と売春との関係は明白だ。なぜなら軍人の多くが売春が行われるバーや休憩所の共同経営者であるか、あるいはその愛人がバーを経営しているかのどちらかである場合がほとんどだからだ。売春街として有名なドクター・サラマンカ通にあった人気の店、ローゼ・ガーデンの場合を見てよう。古くからの住人は次のように述べている。

> 「ここにある施設のほとんどは最近できたもので、軍人が所有しているか、昔は売春婦だった軍人の同棲相手が経営しているものさ」

4人の売春女性、グロリア、エマ、ローズ、レンレン（すべて仮名）たちがフィリピン女性資料センターのインタビューに応えた。4人とも貧しい家庭の出身で、稼ぎ頭である。買春客の多くは博打打ちか軍人であり、彼らは店を経営している軍人の友達や同僚だという。さらに、マネージャーが軍関係者以外を店に入れることは稀だという。軍人は自分たちのグループの部外者と接することになれておらず、部外者の登場によって軍人との間にトラブルが起こるからだ。

捨てられた女性たちと軍隊：コルディレラ地方とポーリン・サラバオの場合

売春女性だけが国軍兵士の犠牲になったのではない。兵士たちはコミュニティーの女性たちをも慰安の手段として利用した。国軍当局は、兵士たちにも楽しむ権利はあると言って、これを正当化している。軍当局から正式なお咎めをうけることなく、兵士たちは女性に言い寄り愛人にしている。

ルソン島北部にあるコルディレラ山脈の村々でも女性たちが国軍の駐留によって影響をうけている。アブラ州ラクプ町では90年代、派遣されてきた兵士たちがインスタント・ラーメンの「マギー」や「クラウド9」のチョコレートなどの食べ物を使って若い女性を誘惑したと報告されている。貧困ゆえに、女性たちは易々とその犠牲になった。

アブラ州、マウンテンプロビンス州、カリンガ州ではすくなくとも103人の兵士たちが地元の女性との間に関係を持っていた。結婚にあたっては部族の伝統に従って、あるいは一般的な形で結婚式を行う兵士もいたが、多くの場合、女性の家族との間で確認を行うだけだった。そして兵士は女性と一緒に暮らすことになる。

ほとんどの場合、二人の関係は長くは続かない。兵士が別の場所へ赴任を命じられれば、地元女性との関係はそれまでとなる。兵士との間に子どもをもうけた多くの女性たちが、自分は捨てられたと感じている。コルディレラ地方のこの三つの州だけで、103人の国軍兵士によって捨てられた98人の女性と118人の子どもたちの事例が報告されている。ある女性の場合、三人の兵士たちと関係を持ったが、すべての兵士がこの女性を捨てた。これらの事例の内訳を以下の表に示す。

3人あるいは4人の子どもをもうけておきながら、全員を見捨てた兵士もいる。報告されている兵士による女性と子どもの切捨ての最も古い事例は1979年のものであり、最近では2002年にも起こっている。

同棲生活のなかで女性の側が、相手の兵士が既婚者である、あるいは他の女性と関係をもっていることに気が付く場合もある。また他の女性との間に子どもがいることが発覚することもある。こうした場合、軍の上官に対して女性が訴え出て正義と賠償を要求することもあるが、うまくいくケースはほとんどない。わずかに援助を得られる場合もあるが、月ごとの仕送りを得ても実際にかかる養育費には足りない。何人かの兵

表1：国軍兵士に捨てられた女性と子どもの事例数（年代別）

国軍兵士に捨てられた女性と子ども（年代別）				
年代	捨てられた女性		捨てられた子ども	
	人数	割合（%）	人数	割合（%）
1986年以前	47	47.96	52	44.07
1986年から1992年	14	14.29	22	18.65
1993年から1998年	16	16.32	15	12.72
1999年から2000年	5	5.1	9	7.64
2001年から2002年	2	2.04	1	0.9
年代不詳	14	14.29	19	16.2
合計	98	100	118	100

表2：国軍兵士に捨てられた女性と子どもの事例数（州別）

国軍兵士に捨てられた女性と子ども				
州	捨てられた女性		捨てられた子ども	
	人数	割合（%）	人数	割合（%）
アブラ州	31	31.64	40	33.9
カリンガ州	58	59.18	71	60.16
マウンテンプロビンス州	9	9.18	7	5.94
合計	98	100	118	100

士は懲罰を受けたとされているが、実際には他の部隊、他地域へ移動しただけである。女性とその家族が訴え出て追及したことによって兵士が除隊させられた事例はわずかに2件である。

本報告にはメアリー・カーリングによるコルディレラ地方での事例研究を収録した。そのなかにカリンガ州バルバラン町に住む女性ポーリン・サラバオのライフ・ヒストリーがある。

1997年1月、バルバラン町は嵐に見舞われた。フィリピン国軍の駐留施設も破壊された。14人の兵士たちがバルバラン町内にあるサルタン村の住人たちに一時的な避難所を提供するよう求めてきた。兵士に場所を提供するためにポーリン・サラバオの一家は近所の家に移ることを余儀なくされた。これがきっかけとなり、ポーリンは自宅を占領した兵士たちのうちの一人、コルポラル・ドミンゴ・カダオアンと知り合う。

その後、数ヶ月にわたってサラバオ家の家屋は軍の特別駐留所となった。この間にポーリンとコルポラル・カダオアンの距離が縮まった。そして二人は婚約することになり、村では「サルワク（sulwak）」という伝統的な儀式が行われた。ポーリンとその家族たちは婚礼の日を待ち望んだ。だが実はコルポラル・カダオアンにはすでに妻と5人の子どもがいたのである。1997年のなかばにコルポラル・カダオアンは別の地域への赴任を命じられ、すでに妊娠6ヶ月となっていたポーリンは置き去りにされた。

1997年11月28日、ポーリンは女の子を出産する。名前はノヴィ・アイリッシュ。だがコルポラル・カダオアンが戻ってくることはなかった。ポーリンの家族が強く要求したために、三年後、ノヴィが三歳になった頃、彼は1,500ペソを送った。はじめてカダオアンに出会ったとき、ポーリンは20代半ばだった。

いまこの貧しい農家の娘は、一人で子どもの養育に責任を負っている。

活動家と制度化された暴力：ハシエンダ・ルイシタの女性労働者の事例

軍事化が女性に与える影響は、売春の拡大やあるいは兵士と先住民女性との間の悲惨な関係だけではない。女性労働者たちは長年にわたってピケット・ラインで制度化された暴力の被害を受けてきた。

本調査の一部として全国的な農民女性団体アミハンがこのことに関して重要な調査を行っている。アミハン議長リタ・マリアノはハシエンダ・ルイシタにおける３人のケースに関して聞き取り調査を行った。そのうちの一人はタルラック市バレテ村に住むフロリダ・V・シバヤン（46）である。

シバヤンは 11 歳のときにハシエンダ・ルイシタで働きはじめた。サトウキビ畑での労働は過酷だった。彼女の仕事はサトウキビの刈り取り、苗の準備、植え付け作業、畑の草刈り、肥料の散布など。労働は午前が７時から 11 時、午後が１時から５時までだった。

1970 年代、一日の賃金は 16 ペソで週に６日か７日働いた。現在では一日 197.5 ペソだが、仕事をできる日数が極端に減らされ、また米代や砂糖代、医療費や教育ローン、社会保障費、組合費などが差し引かれるため、一週間の手取りは 9.5 ペソにしかならない。

農地改革を免れるためにハシエンダ・ルイシタが株式分配制度（Stock Distribution Opotion）を実施した直後から労働日数が減らされた。6,453 ヘクタールの農園全体のうち、4,915 ヘクタールがこの制度の対象とされた。包括的農地改革計画のもとで農民に土地を分配するかわりに、地主であるコファンコ家は小作人に対して合意覚書にサインするよう求めた。この合意は三者によって交わされるものであり、三者とはタルラック開発会社（TADECO）、ハシエンダ・ルイシタ法人（HLI）、そして小作人である。この二つの会社は両社ともコファンコ家が所有しており、したがってコファンコ家は株式全体の三分の二にあたる 66％を所有することになる。この合意によれば、労働者に対する配当は、サトウキビ畑での労働日数によって算出されることとされている。だから労働者がたとえば週に一日あるいは二日しか働くことができなければ、それに相当する額しか受取れないことになる。

一週間の手取りが 9.5 ペソという現実のなかで、シバヤンは家族を支えるために別の収入を探す。彼女は週に二、三度、午前７時から午後２時まで洗濯の仕事をして 100 ペソを手に入れるようになる。だがこの金額も食費に費やせば消えてしまう。電気代などの日々の支出には足りない。

この極限的な貧困こそが、労働組合員であったシバヤンを 2004 年 11 月６日からのストライキへと駆り立てた。11 月 10 日そして 15 日には、他の多くの女性たちとともに催涙ガスにやられ、放水を浴び、警棒で殴られた。そして 11 月 16 日、シバヤンと多くの農民たちは国軍から実弾による発砲を受けた。その日、７人の労働者が命を失った。

それでもシバヤンは毅然とした態度をとりつづけた。マリアノによる聞き取りのなかでシバヤンは次のように語っている。「土地と正当な賃金、仕事と権利。そうしたものを求める闘いのなかで自分の役割を果たすことを通して、私は女性リーダーの模範になりたいと思う」

戦闘地域から来たムスリム女性たち：カリアット地区住民アイーダ・シラヤンの移住経験

軍事化は労働者や農民のコミュニティーに限ったことではない。ミンダナオ、そしてまたマニラ首都圏のような都市部にあるムスリム・コミュニティもまた軍事化の深刻な影響を受けている。そのひとつがケソン市のカリアット地区である。カリアット地区の住民のほとんどはイスラム教徒だ。ただしこの地区は海外に仕事を求めて出国する、あるいは海外出稼ぎから帰国したムスリムの人々が一時的に滞在する中継地である。

皮肉なことだが、ミンダナオでの戦争を逃れてマニラに移住してきたムスリムの人々は、このカリアットでも軍事的な仕打ちを経験している。本報告にはホセ・ティト・ロヨラによるカリアット地区に住むムスリム女性たちへの聞き取りを収録した。それによれば、マニラ首都圏で「テロ」事件（たとえばバス爆破など）が起こるたびにこの地区に対する警察の手入れが行われている。家々が手当たりしだいに捜索され、テロリスト容疑をかけられたムスリムが逮捕される。この警察による手入れは、戦争によって避難を余儀なくされたミンダナオでのトラウマ的な記憶を住民たちのなかに呼び起こす。

ロヨラによるインタビューのなかで、カリカット地区の住民アイーダ・シラヤンはミンダナオ島コタバト州にあるカバカンでの戦争がいかに彼女の人生に影響を及ぼしたかを詳述している。シラヤンによれば、彼女の子ども時代を通してずっと「反乱勢力」と国軍兵士は交戦していた。国軍が「ムスリム反乱勢力」を探すと称して村を襲撃するかもしれないという時には、つねに彼女の家族や近所の人々、さらにバランガイ（フィリピン社会の最小行政単位）の全体が避難した。当時、彼女にはこの戦争の意味はわからなかった。だが、避難して別の場所へと移動していくのが大変だったこと、地下に造られた一時避難所で三家族が身を寄せ合っていたこと、銃撃を避け国軍から隠れている間、一週間分の食料をどうやって保存したか、自分たちの村で一般人がどうやって国軍に逮捕されていったかを聞き取りのなかで語っている。

国軍は様々な方法で住民に嫌がらせを加えた。村にやってくると、国軍は地域税証明書（CTC）を出せと要求する。住民がそれを見せることができなければ名前を書かされるのだが、ほとんどの人が読み書きができない。こうした住民に国軍は屈辱的な命令をする。たとえばその場で歌えとか、踊れとかいうのである。

シラヤンは戦争と貧困のために小学校を卒業することができなかった。幼い働き手として、彼女は両親がトウモロコシや稲などの畑仕事をしている間、家で掃除や洗濯をした。だが戦争が激しくなると、働くことさえできなくなった。

結婚してから、シラヤンは子どもを養うために仕事を探したが、見つけることができなかった。そして海外での家政婦の仕事を探すためにマニラにやってきた。だがそれも簡単ではなかった。しかたなく彼女は小さなお店で働くことにし、なんとか子どもたちに仕送りをしている。ミンダナオでの戦争さえ終れば、状況は良くなり家族のもとへ帰ることができるのに、と彼女は言う。

女性政治囚たち：拷問の手段としてレイプ

ヒルスドンの著書には市民災害復興センター（CDRC: Citizen's Disaster Rehabilitation Centre）、国際赤十字社、ガブリエラによる様々な統計資料がまとめられている。たとえば 1988 年だけで 30 万人の人々が武力紛争によって立ち退かされた。フィリピン共産党の軍事組織、新人民軍（NPA）の疑いをかけた者に対する軍事作戦は、結果として一般人に対する暴力をもたらしている。さらにこうした軍事作戦のなかで性的暴力、性的拷問、レイプが行われている。ガブリエラによれば 1986 年から 1988 年までの間に 56 人の女性が逮捕・拘束され、14 人が避難を余儀なくされ、32 人が殺されている。また 4 人がレイプされ、2 人が行方不明となった。(Hilsdon 1995, pp.110-111)

こうしたデータとならんで、フィリピンの女性政治囚に対する性的暴力に関する彼女の研究は極めて重要である。ヒルスドンは女性たちへの虐待を、ローマ・カトリックが強い影響をもつフィリピン社会の文脈のなかで分析する。処女マリアにならって純潔を守るようにという強い社会的価値観、聖マリア・ゴレッティのように貞潔を守るべしという「殉教者のパラダイム」、処女マリアや聖人たちの純潔な体と他方でのイブやマリー・マグダレーナという性的な体への二元化。こうした文脈のなかで考えれば、新人民軍の女性兵士たちが「アマゾネス」とか「売春婦」などと罵倒され、社会における「倒錯者」だと呼ばれるのも驚くことではない。「売春婦」とされるがゆえに、彼女たちはその肉体に対する暴力という罰を受ける。ミンダナオ

東部での農村コミュニティーを対象としたヒルスドンの研究は、国軍の男性兵士が「農民男性からその妻を借り受ける」と称して、女性を夫の前でレイプしたり、あるいは新人民軍との関係が疑われた男性の妻に対して性的拷問を加えている、といった事実を明らかにしている。

ヒルドソンの論文「フィリピン社会における性差別と軍事化」のなかで、キャロリン・イスラエル・ソブリシアは次のように述べている。「もしもこの国が過去数十年間の間に軍事主義、軍事化の方向へと急激に向かうことがなかったとしたら、女性に対する多くの人権侵害は避けられただろう。」ソブリシアはまた、国の資源が国軍の増強のために使われたと指摘する。兵士の増員と準軍事組織への資金提供、装備の拡充と国軍諜報機関のネットワーク拡大が行われたのである。女性と子どもに対する軍事化の影響を概括するものとしてソブリシアは次の点をあげている。家族の死や失踪に苦悩する母親たち。殺害、レイプ、食料の供給停止、銃による立ち退きと監禁、拷問、違法な拘束、その他の虐待。健康と教育を侵害する女性と子どもへの立ち退き、である。(Sobritchea 1992 pp.20-21)

ヒルドソンとソブリシアの研究から次の事例を知ることができる。

1：エドナ・ヴェレス。1987年4月パナイ島カディス市にて逮捕。取調べのなかで、エドナは性的暴行を受けた上、刃物で刺す、切るなどされ死亡した。
2：アーリーン（通称）。1985年3月ダバオ市で逮捕。国軍は彼女に対し、指から感電させる、指の間に銃弾を打ち込む、新聞紙を食べさせる、ピストルの銃床で襟首を殴るなどした。裸にさせられた上、踊ることを強制された。兵士は満足いかないと、彼女の全身に胡椒をすり込んだ。収監中、彼女は何度も拷問され、強姦された。その結果、彼女は妊娠している。
3：フェミニスト活動家ティタ・ルビはガブリエラ・人権問題委員会の報告書のなかで、自らが虐待された経験を語っている。裸にされ、性器に指を入れられるなどされた上、ヴァギナに唐辛子や瓶を差し込むぞと脅された。またルビは、女性の囚人たちはみな乱暴に扱われ、刑務所に到着する前から兵士に触られたり、抱きつかれたりしたと述べている。なかには刑務所内での自由を得ることと引き換えに兵士の性的な誘いに応じたり、「ガールフレンド」になってましなあつかいを受けようとする者もいた。女性の政治囚はレイプの対象だった。
4：ゼナイダ（通称）。彼女の話はヒルダの著書に収録されている。彼女によればレイプには多くの場合、肉体的、性的暴行がともなう。自らも首を絞められ、顔や腕、足を殴られたと述べている。拉致実行者に銃を突きつけられて、彼女はフェラチオをすることを強制された。

これら女性政治囚の証言は映画にもなった。ボニファシオ・イラガンによる「民衆の崇拝（Pagsambang Bayan)」は1977年にベーン・セルバンテス監督の下、UPレパートリー・カンパニーによって製作され、レイプを含む拷問の様子が描かれている。エドガルド・マラナンの「クリスティーの時（Panahon ni Cristy)」は1978年、これもUPレパートリー・カンパニーによって製作され、女性の囚人たちの悲哀を描いた。また1985年製作のクリス・ミラド「E♭メジャーの月と銃（Buwan at Baril sa Eb Major)」のなかには、軍事化された状況下に生きる先住民女性の姿が描かれている。

以上、いくつかの事例を見てきた。ルソン島南部カビテ州をはじめ、国軍と外国軍の基地周辺における売春の拡大。コルディレラ地方での国軍による軍事化とそのなかで虐待され、捨てられた女性たち。中部ルソン地方タルラック州での農業労働者の集団虐殺に示されたピケット・ラインにおける制度化された暴力。ミ

ンダナオでの戦争による移住。政治囚をはじめとする女性に対する拷問の手段としてのレイプの実行。これらのことから「戦争下の女性の身体」とは新植民地支配に組み込まれ、グローバル化され、使い捨てられる身体のことであり、それはまた新たに資本主義化され軍事化される社会のなかで売買され、あるいは統制されているということが明らかとなる。

まとめ：軍事化された身体を文脈のなかで捉える

こうしたことから本論文は以下のことを明らかにしている。

第一に、フィリピン女性の「交換される身体」はフィリピンの極限的な貧困を物語っている。とりわけ農村部で女性が魚や缶詰、米と引き換えに性的サービスを提供する場合、その対価はその日一日を暮らすためのものでしかない。

第二に、軍事化は売春の拡大を促すとともに、男性兵士による女性への誘惑を生み出す。だがこれらの兵士は「第二の家族」であるこの女性たちを捨てる。このことは女性の身体が使い捨てられる物としての位置に置かれ、男性が戦闘に従事するために必要なサービスを供給する物として位置づけられていることを示している。つまりフィリピン女性は戦争の「不可視」の、また副次的な被害者でもあるということができる。

第三に、フィリピン人女性の身体はいまやグローバル化した新植民地主義体制に組み込まれている。ピケット・ラインで女性労働者たちが経験する暴力は、その身体がいかに軍隊と警察によって統制されているかを示している。「従順で、物言わぬ」身体こそが私的に所有された多国籍企業の利益に合致するからである。

第四に、政治囚に対する拷問の手段としてのレイプの実行は、活動家の身体の統制が、財界および抑圧的政権の利害と関連していることを示している。レイプあるいはレイプするぞという脅迫（身体への暴力）は、外国資本と独裁者のファシスト的支配を維持するという利害から行われている。

本文章はNGOおよび民衆組織で活動する在野の研究者によってなされた調査に基づく予備的文書である。近日発表予定の報告書全文によって、フィリピンにおけるジェンダーと軍事化に関してより豊富なデータと詳細な分析を提供する予定である。

フィリピンにおける女性の身体は戦争によって形作られてきた。いまもつづく帝国主義によるフィリピン経済の支配は、民衆の貧困を拡大する一方、主権と平等な社会を求めるフィリピン民族主義者たちの闘争を呼び起こし、そしてまた資本家と政府の利害を守るための軍事化を生み出してもいる。

本研究が「戦争の舞台としての身体」に関する研究の一助となることを心から願うものである。

【河合大輔　訳】